早稲田大学大学院教育学研究科

博士学位審査論文 概要書

国語科教育における
マンガ教材の選定・開発をめぐる探究

―藤子・Ｆ・不二雄『ドラえもん』の意義と可能性―

2020

岸　圭介

1. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

はじめに …… i
第 1 章　国語科教育におけるマンガ教材研究の視座 …… 1
第 1 節　「学びの一元化」という観点 …… 1
1.1　児童文化と学校教育を接続する意義 …… 1
1.2　マンガ読書をめぐる「主体性」の問題 …… 3
1.3　マンガ読書の実態とリテラシー教育の必要性 …… 5

第 2 節　国語科教育におけるマンガ教材研究の方向性 …… 6
2.1　マンガ教材研究における「知識・技能」の問題 …… 6
2.2　PISA 読解力調査の結果に見るマンガの教育的可能性 …… 8
2.3　「マルチモーダル・テクスト研究」の現代的展開 …… 9
2.4　マンガ教材研究における中核的な研究課題（Research Question） …… 10

第 3 節　国語科教育におけるマンガ教材研究の基本的枠組み …… 11
3.1　国語教育研究とマンガ研究との往還 …… 11
3.2　マンガ教材研究で照射するべき二局面 …… 12
3.2.1　児童文化における「読書観」の変容 …… 12
3.2.2　国語科授業のプロセスから考えるマンガ教材分析の観点 …… 14

第 4 節　国語科授業場面におけるマンガ教材研究の四観点 …… 16
4.1　マンガ教材の選定基準と「固有性」の問題 …… 16
4.2　マンガ理論に基づく「教材性」の分析と教材化の手立て …… 17
4.3　マンガ教材をめぐる「関心・意欲」の所在 …… 18
4.4　「マンガ・リテラシー」と読解力との相関性 …… 20

第 5 節　本研究を貫く研究構想図 …… 21
5.1　本研究の目的 …… 21
5.2　本研究における六項目の研究課題 …… 22

第 2 章　本研究における研究方法 …… 27
第 1 節 研究方法の方向性 …… 27
1.1　学習者の必要感に基づく教材選択 …… 27
1.2 「機能的教材」の解明という視座 …… 28

第 2 節 「媒材」の視座に基づく多面的研究の必要性 …… 29
2.1 国語教育研究における「教材・学習材論」の史的潮流 …… 29
2.2 媒材による「動的な「はたらき」」という影響 …… 30

第 3 節　国語教育研究における質的研究の有効性 …… 32
3.1　「学習者研究」における質的研究 …… 32
3.2　「質的研究」の特性 …… 32
3.3　国語教育研究の動向に見る「質的研究」の隆盛 …… 33

第 4 節　本研究における分析手法 …… 34
4.1　「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ
（Modified Grounded Theory Approach）」の援用 …… 34
4.2　質的研究法における「客観性」の問題 …… 35
4.3　メタ理論「構造構成的質的研究法（SCQRM：
Structure-Construction Qualitative Research Method）」の必要性 …… 37
4.4　分析対象と分析データの確保 …… 37

第 3 章　「消費的読書観」に基づくマンガ教材開発の方向性 …… 40
第 1 節　研究の背景 …… 40
1.1　メディア間における「読むこと」の相互性 …… 40
1.2　メディア変遷の影響による「読書観」の変容の問題 …… 41
1.3　分析の方法 …… 42

第 2 節　1970 年代に見る「読書観」の変容 …… 42
2.1　国語教育研究における「読むこと」の定義の拡張 …… 42
2.2　メディア発展に伴う新たな読書観の萌芽 …… 44

第 3 節　児童文化における「消費的読書観」の醸成 …… 46
3.1　子ども向けの「名作」に見る読書観の実態 …… 46
3.2　マンガ読書による「消費的読書観」の促進 …… 48

第 4 節　現代社会における「消費的読書観」の蔓延 …… 50
4.1　情報のデジタル化における「消費的読書観」の広がり …… 50
4.2　「不読者」と読書の動機付けの関係性 …… 51
4.3　デジタル化が進むマンガ読書 …… 52

第 5 節　「消費的読書観」に向き合う国語教育の方向性 …… 53
5.1　「遅い情報」の現代的価値 …… 53
5.2　「熟考する過程」の必要性 …… 55
5.3　「予見性」を育成する教材化の手立て …… 56

第 6 節　本章のまとめ …… 58

第４章　マンガ教材の選定基準と「固有性」の問題 …… 60
—藤子・Ｆ・不二雄『ドラえもん』の教材性—
第１節　研究の背景 …… 60
1.1　国語教育史におけるマンガ教材の変遷 …… 60
1.2　マンガ教材に関わる選定基準の必要性 …… 61
1.3　分析の方法 …… 62

第２節　4 象限マトリクスを活用した「マンガ教材選定基準」の構築 …… 62
2.1　町田（1995, 2014, 2015）の言説に見る教材選定眼 …… 63
2.2　ポジショニングマップによる「マンガ教材選定基準」の分析 …… 64

第３節　児童文化との接続をねらった「マンガ教材選定基準」 …… 66
3.1　児童文化におけるマンガ読書の特性 …… 66
3.2　「娯楽性」を基軸とするマンガ教材化への課題 …… 68

第４節　学習者と「ドラえもん」の親密性 …… 69
4.1　児童文化における「ドラえもん」の浸透度 …… 69
4.2　教育環境としての「ドラえもん」の機能 …… 70
4.3　学校教育における『ドラえもん』の活用事例 …… 71

第５節　『ドラえもん』教材の固有性 …… 73
5.1　マンガ・リテラシー育成のための基礎・基本 …… 73
5.2　「話型」を学ぶための類型的な構造 …… 73

第６節　初等教育における『ドラえもん』の授業実践 …… 74
6.1　キャラクターに「なりきること」を通じた学び …… 74
6.2　初等教育におけるマンガ活用の方向性 …… 75
6.2.1　マンガ教材活用の実際 …… 75
6.2.2　学習者の感想から見えるマンガの教育的可能性 …… 77

第７節 本章のまとめ …… 80

第５章　文学作品に近似するマンガの「教材性」の実相 …… 81
第１節　研究の背景 …… 81
1.1　マンガと文学作品の読解技能における近似性 …… 81
1.2　「関係構築力」に見る読解過程の近似性 …… 82
1.3　分析の方法 …… 83

第２節　教材開発に向けたマンガ理論からの示唆 …… 85

2.1　グルンステン（2009）による理論の枠組み ……85
2.1.1　「図像的連帯性」というコマの連なり ……85
2.1.2　「関節論理」としての物語性 ……86
2.2　マクラウド（1998）による理論の枠組み ……87
2.2.1　コマ間の意味を生成する「補完」効果 ……87
2.2.2　キャラクターのデフォルメ化による「同化」効果 ……88

第 3 節　国語教育研究の知見に見るマンガと文学作品の近似性 …… 89
3.1　「関節論理」を有する構造の近似性 ……89
3.2　「視点人物」における近似性 ……90
3.3　マンガにおけるメディア特有の読解技能 ……92
3.4　「中心人物の変容」に関わる近似性 ……93
3.5　読者における「主題創造」としての近似性 ……95

第 4 節　本章のまとめ …… 98

第 6 章　国語科授業場面における
マンガ教材が誘発する「関心・意欲」の諸様相 …… 100
第 1 節　研究の背景 …… 100
1.1　マンガ教材と「関心・意欲」の相関を示す研究の方向性 ……100
1.2　マンガ教材が誘発する「関心・意欲」の実相の解明 ……101

第 2 節　研究の概要 …… 102
2.1 授業の概略 ……102
2.1.1 対象者 ……102
2.1.2 マンガ教材 ……102
2.1.3 教材観 ……102
2.1.4　ねらいと教材化の手立て ……103
2.1.5 授業の展開 ……104
2.2 研究方法 ……104
2.2.1 質的研究法 ……104
2.2.2 質問紙調査 ……104

第 3 節　分析の結果 …… 105
3.1 【関心・意欲を向上させる誘因】に関わるカテゴリと概念 ……105
3.1.1 【マンガ教材の諸特性】 ……105
3.1.1.1【文化的特性】 ……105
3.1.1.2【内容的特性（固有性）】 ……106
3.1.1.3【構造上の特性】 ……106

3.1.2 【授業展開の工夫】 ……107
3.2 【既習事項と往還した学び】に関わる概念 ……108
3.3 【学習者の変容】に関わる概念 ……109

第 4 節　モデル図の生成と考察 ……110
4.1 マンガと学校文化との対峙と融和 ……111
4.2 マンガの構造特性による学習の促進 ……113
4.3 マンガの世界観とキャラクターに抱く情感 ……114
4.4 マンガ教材の活用による「読書観の変容」の示唆 ……114

第 5 節　本章のまとめ ……115

第 7 章　学習者の省察に基づく
マンガと連続型テキストの読解における構成要素の同異 ……117
第 1 節　研究の背景 ……117
1.1　認知発達心理学分野におけるマンガ研究の方向性 ……117
1.2　マンガと連続型テキストを結ぶ読解要素の解明 ……119

第 2 節　研究の概要 ……120
2.1 授業の概略 ……120
2.1.1 対象者 ……120
2.1.2 マンガ教材 ……120
2.1.3 教材観 ……120
2.1.4 ねらいと教材化の手立て ……121
2.1.5　授業の展開 ……122
2.2 研究方法 ……123
2.2.1 質的研究法 ……123
2.2.2 質問紙調査 ……124
2.2.3 事前分析による「読みの傾向」の把握 ……125

第 3 節　分析の結果 ……125
3.1【マンガの読解要素】に関わるカテゴリと概念 ……126
3.1.1【マンガ特有の読解要素】に関わる概念 ……126
3.1.2【マンガ・物語・説明文共通の読解要素】に関わる概念 ……127
3.2【マンガと「物語」との類似】に関わる概念 ……128
3.3【物語特有の読解要素】に関わる概念 ……130
3.4【マンガと「説明文」との類似】に関わる概念 ……130

第 4 節　モデル図の生成と考察 ……131

4.1 マンガ・リテラシー育成の必要性 ……131
4.2 物語スキーマや説明スキーマとの関連性 ……133
4.3 異なるメディア間を往還する「読みの方略」 ……134

第 5 節　本章のまとめ ……135

第 8 章　マンガ教材を活用した国語科授業デザインの開発 ……137
第 1 節　研究の知見を踏まえたマンガ教材研究の流れ ……137
1.1 各章で明らかになった知見の要点整理 ……137
1.2 授業デザイン開発に向けたマンガ教材研究 ……138
1.2.1 教材選定の基準 ……138
1.2.2 教材化の手立て ……138
1.2.3 読解技能の想定 ……139

第 2 節　マンガ教材を活用した国語科授業デザイン ……139
2.1 想定する対象学年 ……139
2.2 マンガ教材 ……141
2.3 教材観 ……141
2.4 ねらいと教材化の手立て ……141
2.5 単元計画 ……142
2.5.1 単元名 ……142
2.5.2 単元の目標 ……143
2.5.3 評価基準 ……143
2.5.4 評価基準の視座からの作品分析 ……143
2.5.5 本時の展開（1／1） ……146

第 3 節　本章のまとめ ……147

第 9 章　研究の成果と課題 ……148
第 1 節　研究の成果 ……148
1.1 「言語主体の変容」に関わる知見 ……148
1.2 マンガ教材が誘発する「関心・意欲」の高まりに関わる知見 ……149
1.3 「マンガと連続型テキストの読解における構成要素」に関わる知見 ……150
1.4 マンガ教材を効果的に活用する「授業デザイン」に関わる知見 ……150

第 2 節　今後の課題と展望 ……151

初出一覧 ……152
文献一覧 ……154

2. 本研究の目的

本研究の目的は「国語科教育においてマンガ教材を活用する意義を明らかにすること」にある。多面的にマンガというメディアの実相を捉える研究によって、マンガ教材を効果的に活用するための基礎的な枠組みを提示することが可能になると考える。

町田（2014）では「特に教科教育との関連でマンガを活用する実践を構想する際に、いかなる学力の育成を図るのかという点を明らかにしなければならない」(p.178) として「学力論・評価論との関連」を、マンガの教材化をめぐる重要課題と位置付けている。そのため、本研究では町田（2014）が提起する問題意識を発展的に継承し、「国語科教育に関わる資質・能力は、マンガ教材をどのように扱うことで育成できるのか」という研究関心を中核的な研究課題（Research Question）として設定する。

この課題を解決するにあたっては、国語科教育の視座からの「マンガの教材選定・開発における方法論の構築」が求められる。そのため、一定の教育的効果を担保する「マンガ教材を活用した国語科授業デザインの開発」を本研究の到達地点とした。

3. 本研究の方法

3.1 章別の研究手法

本研究においてはマンガ教材に関する理論的側面と、マンガ教材を通じた学習者の心情に関わる実践的側面の二つのアプローチからの分析を試みる。

第 3 章から第 5 章までは「理論編」とする。第 3 章においては、主に「史的研究」の視座から「読書観」の変遷を分析する。マンガが社会に浸透するに伴い、人々の「読書観」にどのような影響を与えたかを明らかにする。これは国語科授業における「媒材」の実相の解明にもつながると考える。

第 4 章では主に「社会学研究」の視座から、学習者に必要なマンガ教材の選定基準を定め、固有のマンガ作品が教育環境として機能している実情を分析する。個別・具体的なマンガ作品に対する一定の感覚や価値観は「学習材化」に必ず反映するものと考える。

第 5 章では主に「マンガ研究」の視座から、文学作品に近接するマンガの読解技能の実相について分析する。マンガと文学作品との往還性に関わる知見は、マンガに関わる「教材性」の理解につながるものと考える。総じて第 4 章・第 5 章は、広く国語科教育における「マンガ教材研究」として位置付けたい。

第 6 章・第 7 章では「学習者研究」の視座から、マンガ教材で学んだ学習者の心情を分析対象とする。第 6 章では、マンガ教材を活用した国語科授業を手がかりとして、学習者の関心・意欲が高まる具体的な誘因について分析をする。浜本（2011）は学習材の機能について「学習者にはたらきかけ、学習者がはたらきかけたときに成立する動的な「はたらき」なのである」(p.39) と指摘したが、マンガ教材を介して生じる学習者の心情の変化は、

こうした「動的な「はたらき」」の一端を示していると言える。そのため、関心・意欲を高める「媒材」の実相を可視化して明示をすることを試みたい。

第 7 章では、マンガと物語、説明文との読解過程に関わる構成要素の共通点と相違点を分析する。国語科授業という文脈において、どのようにマンガ教材が読まれるかという事実の解明は、マンガ教材研究の重要課題であると言える。マンガを読む際に、蓄積された文字テクストの読書経験がどのように活かされるのかを明らかにしたい。

桑原（1996a）は、言語生活の地平から教材を三層に分類し、マンガを「機能的教材」に位置付けている。これは「教材とは別の文化的価値をもっているものもあるが、その価値が即刻国語教育のための教材としての価値にはならず、国語教育の目的、例えば語彙指導の目的のもとに初めてその独自な価値や有効性が発揮されていくもの」（p.203）と定義されている。第 7 章での課題は、マンガの有する教材としての「独自な価値や有効性」を明らかにするものとして位置付けられる。

3.2 「質的研究法」の援用

第 6 章・第 7 章の「学習者研究」では、目的や分析の方向性に合致する方法論として、国語教育研究でも主要な分析手法として用いられている質的研究法を援用する。主な理由は以下の通りである。

第一に、理論構築につながる「仮説生成」を目的とした研究手法である点である。西條（2007）は質的研究法の特性を「仮説生成に向いている」（p.23）点にあるとした。対象とする研究の範疇で知見として築かれていない仮説モデルを構築することで、これまで可視化されてこなかった特定事象の構造を学術的な見地から提示することが可能となる。国語教育研究の分野におけるマンガ教材研究は萌芽的な段階であり、本論文の目的に合致する先行モデルは見当たらない。こうした理由から質的研究を援用する必要があると判断した。

第二に、学習者の心情面の分析に優れた研究手法である点である。例えば、マンガ教材を用いた授業に対してどのような情感を抱いたかという心情の機微は、簡単に数値化できない問題を孕んでいる。学習者における学びの経験に関わる質的分析によって、マンガ教材の導入にどのような教育的意義が存在するのかを明らかにできると考えた。

3.2.1 「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach）」の援用

本研究では、質的研究法の中でも木下康仁によって提唱された「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach）」を援用する（以下、「M－GTA」と略記する）。グラウンデッド・セオリーは「データに基づいた（grounded-on-data）理論」（木下, 2007: p.70）である点に特徴がある。M－GTA では、科学的に客観性

を保つための「分析ワークシート」を用いることに研究方法としての独自性がある。

本研究において、M－GTA を採用した理由は主に二点ある。第一に、M－GTA が理論の仮説生成に優れている点である。第 6 章では小学 2 年生を対象として、国語科授業でマンガ教材を扱った際の学習者の心情を分析する。あわせて第 7 章では小学 4 年生を対象とするマンガ教材を用いた国語科授業を通して、マンガと物語・説明文の読解過程を学習者自身が振り返り、比較した結果を分析の射程としている。量的研究による統計的な分析では、マンガ教材を用いた授業のどのような側面に学習意欲が高まるのかという実相を掴むことには困難を伴う。加えて、読解場面で生じる現象のすべてを明示することは難しいと言える。よって、質的分析を通じて、学習者の言葉に内包された意味を明らかにすることで、マンガ教材を用いた国語科授業の新たな価値を見出すことができると考えた。

第二に、M－GTA のもつ教育研究との相性のよさが挙げられる。木下（2003）が「実践的な活用のための理論生成の方法」(p.29) と位置付けているように、M－GTA は生成された理論が社会的な場に戻されて、試されることを通じて検証が可能となる。授業とは常に授業者の内省を必要とする営みであり、質の向上のためには学習者の現実に即した分析を行うことが求められる。また、本研究では分析者と授業実践者が同一人物であるため、アクションリサーチとしての側面も持っている。学習者の言葉を手がかりに授業を組み立てていく、教育現場の風土に合致した分析手法と評価することができる点も考慮した。

3.2.2 「構造構成的質的研究法（SCQRM : Structure-Construction Qualitative Research Method)」の援用

本研究では「一般化・実証性」・「恣意性」の問題を超克する「理論的枠組み」として、「構造構成的質的研究法（SCQRM : Structure-Construction Qualitative Research Method)」(西條, 2007) を援用する（以下、SCQRM と略記)。SCQRM の中核には「関心相関性」という概念が存在している。西條（2007）に拠れば、「関心相関性」は「存在や意味や価値といったものは、すべて身体や欲望、関心、目的といったものと相関的に規定される」(p.5) とする考えに基づいており、ものごとがもつ意味や価値は我々の身体や欲望、関心や目的とは別に、独立しては存在し得ないとすることを意味している。つまり、研究を構成する要素の「価値」もまた研究者の関心や研究目的と相関的に規定されることになる。従って、研究方法の手順や対象者数なども、広義の科学性を担保しながら採用することが理論的に可能となる。

西條（2005）は現象を構造化し、概念図を作成する条件として「構造化に至る軌跡」を明示することを掲げている。SCQRM ではこうした手立てにより、不当に知見の信憑性が低下しないように広義の科学性を保ち、得られた知見の有効性や限界を判断できる材料を開示することにつなげている。本研究においても、分析手順を順序立てて明示し、学習者

が記した感想に関しても、生成したカテゴリの意味付けがわかるように例示を行った。

また、西條（2005）では「M－GTA は現在の認識論から分析法、論文執筆に至るまで体系的かつ実践的にまとめられている優れた枠組みであり、関心相関的構成法と高い類似性がみられる」（p.196）ことを掲げていることから、M－GTA を分析手法として援用する本論文の方向性にも合致するメタ研究法であると判断した。

4. 本研究における章立てと研究課題

本論文全体の章立てと研究課題は以下の通りである。第 1 章では「研究全体の目的や方向性、枠組み」を示した。第 2 章では「具体的な研究方法」に関して言及を行う。

第 3 章から第 5 章までは「理論編」とする。学際的な視座から児童文化に内在する「マンガを読むこと」を俯瞰的に捉え、意味付けを行う。また、先行研究から固有のマンガ作品に着目し、教材性を明らかにする。さらにマンガ研究の視座からマンガ理論を援用しつつ、文学作品を中心とする文字テクストとの読解過程の比較を行う。

第 6 章と第 7 章は「実践編」とする。稿者の勤務する私立小学校（東京都）における授業実践を中心に、学習者研究を通じて得られた知見を分析する。

第 8 章は「理論編・実践編のまとめ」とする。得られた知見を基にして、総合的な見地から国語科授業におけるマンガ教材を活用した授業デザインを提示する。

第 9 章は「研究全体の総括」とする。本研究の成果と課題を記したい。

本研究の目的を達成するために、細分化した六項目の研究課題を設定した。第 3 章から第 7 章までは、それぞれ個別の研究課題の解決のための章とする。

以下、第 3 章から第 7 章で扱う研究課題ごとに整理をする。

第 3 章では「学校外で『マンガを読むこと』を通じて、どのような読書観が身に付くか」という課題を解明する。習慣化された「マンガを読む」という行為が活字読書にもたらす影響を具体的に明示する。

第 4 章では「『ドラえもん』に固有の教材特性とは何か」という課題を解明する。マンガ教材を選定するためには一定の基準が求められる。まず児童文化との接続の観点から、新たなマンガ教材の選定基準を構築する。次に、藤子・F・不二雄『ドラえもん』（小学館, 1974 年）の教材性について検討を行う。『ドラえもん』が学習者に与える影響を多角度から掘り下げて研究を行うことで、教材性の実相を明らかにする。

第 5 章では「文学作品に近似するマンガの教材性とは何か」という課題を解明する。松山（2014）の文学作品の読解に応用可能な「関係構築力」の定義に拠りながら、文学作品に転用可能な読解技能の実相を明らかにする。そのために、汎用性の高いマンガ理論を援用しつつ、国語教育研究における「読者論」の視座から、『ドラえもん』の分析を実施する。

第 6 章では「マンガ教材で関心・意欲が高まる誘因とは何か」という課題を解明する。

教材は「教材そのもの」の内容や質だけが、学習者を惹きつけるものではない。小学 2 年生を対象とする国語科授業でマンガ教材を扱った際の学習者の心情の在り様を分析する。学習者を惹きつける諸様相を図式化することで、新たな知見を確立する。

第 7 章では「マンガと連続型テキストの読解過程の同異点とは何か」という課題を解明する。小学 4 年生を対象とするマンガ教材を用いた国語科授業を通して、マンガと物語・説明文との読解過程を学習者自身が振り返り、比較する場を設ける。そこで得られた読解過程の構成要素をモデル化し、共通点・相違点を明示することとする。

第 8 章では「マンガ教材を効果的に活用する授業デザインとはどのようなものか」という課題を解明する。ここまでの章で得られた知見を踏まえつつ、マンガ教材活用モデルとしての授業プランを提示することで、国語科授業におけるマンガ教材開発の方向性を提示する。各章における研究課題の整理を通じて、本研究の全体構想を描くに至った（図 1)。図 1 では、本論文における分析の中心となる第 3 章から第 8 章のみを提示している。

以上をもって、本論文の研究構想とする。

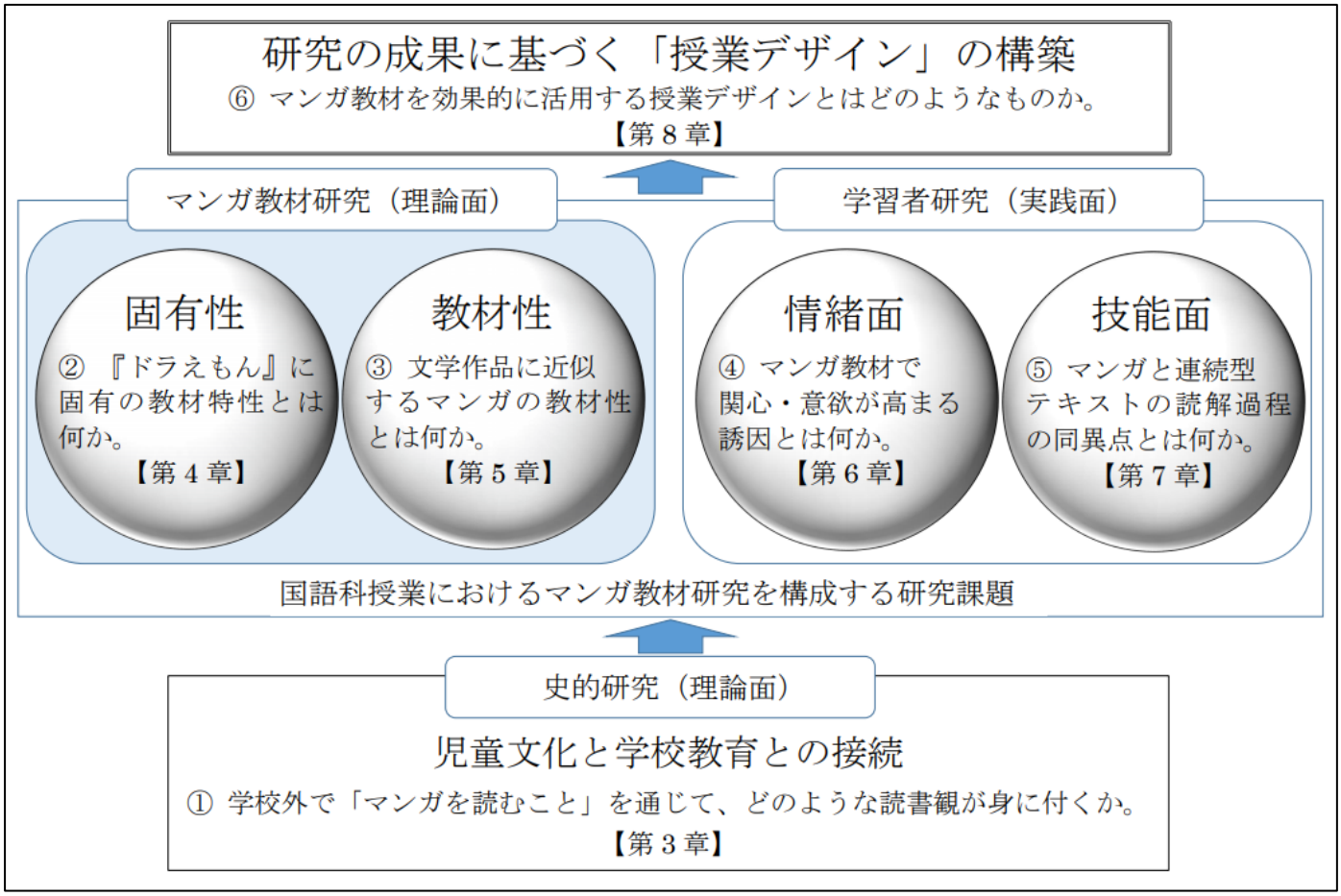

図 1　本研究の研究構想図

5. 各章で得られた知見の整理

第 3 章から第 7 章までに得られた知見を以下に整理する。第 3 章の目的は、マンガ読書を通じて醸成される読書観の実相を明らかにした上で、マンガ教材開発の方向性を明示することであった。結果として、現代社会には表層的に情報を取得する「消費的読書観」が蔓延しており、マンガの教材化には「熟考する過程」が必要なことが明らかになった。教材化の手立てによって、学校外でのマンガの読み方に変容が生じることが示唆された。

第 4 章の目的は二点あった。第一に、新たな観点から「マンガ教材の選定基準」を構築することである。第二に、作成をした基準に合致したマンガ教材を発掘することである。結果として、学習者に身近な「娯楽性」の観点からマンガ教材を選定することで、マンガに対する価値観が変容する可能性があること、また、学習者を取り巻く環境や作品独自の固有性を考慮すると『ドラえもん』が国語科教材にふさわしいことが明らかになった。マンガ教材の選定には、児童文化と学校教育の接続の観点が必要なことが示唆された。

第 5 章の目的は、文学作品に近接するマンガの教材性の実相を明らかにすることにあった。結果として、マンガ研究と国語教育研究の「読者論」の視座から分析を行うと、表現構造や読解過程の観点で文学作品と共通する教材性を有していることがわかった。異なるメディア間における共通性の存在から、架橋する読解技能が示唆された。

第 6 章の目的は、国語科授業でのマンガ教材の活用において、学習者の関心・意欲が高まる具体的な誘因を明示することにあった。結果として、「マンガの諸特性」である「構造上の特性・文化的特性・内容的特性（固有性）」の三点が誘因として確認された。また、マンガのメディア特性以外にも教師の「授業展開の工夫」によっても関心・意欲が高まることが明らかになった。マンガ教材を効果的に扱う手立てにより、学習への取り組みがさらに向上することが示唆された。

第 7 章の目的は、マンガと連続型テキストとの読解過程の構成要素の同異点を明示することにあった。結果として、読解過程の構成要素においては、マンガのメディア固有の要素もあれば、マンガと物語、説明文の読解に共通する要素もあることが明らかになった。こうした分析結果から、別種のメディア間を横断する読解技能が存在することや、国語科教育におけるメディアの枠組みを超えた学びの可能性が示唆された。

本研究では、一定の教育的効果を担保する「マンガ教材を活用した国語科授業デザインの開発」を到達地点としていた。最終的に第 8 章では各章で得られた知見を整理し、「国語科授業におけるマンガ教材研究の流れ」（図 2）を提示するとともに、藤子・F・不二雄『ドラえもん』（第 28 巻, 小学館, 1983 年）を活用した授業案を考案した。これは本研究の中核的な研究課題（Research Question）である「国語科教育に関わる資質・能力は、マンガ教材をどのように扱うことで育成できるのか」に対する答えとして位置付けられる。

6. 研究の成果と課題

本研究では、国語教育研究で明示されていなかった知見として、以下四点の主な成果を挙げることができた。

6.1 「言語主体の変容」に関わる知見

日常的に親しんでいるマンガの教材化によって、消費的・娯楽的な読み方から脱却し、学校外でも「熟考する過程」を経て読んでいこうとする姿勢が確認された。第 1 章では、マンガ教材に関わる一つの課題として「授業後にどのような質的変容が生じるか」という問いを掲げていた。国語科授業でのマンガ教材の活用によって「言語主体の変容」が生じることが示唆される。第 3 章では 1970 年代から「消費的読書観」が醸成されてきたことを指摘したが、こうした学習者の読書観が変化することを示しており、マンガ教材を用いた国語科授業における一つの教育的効果として位置付けることができる（図 3)。

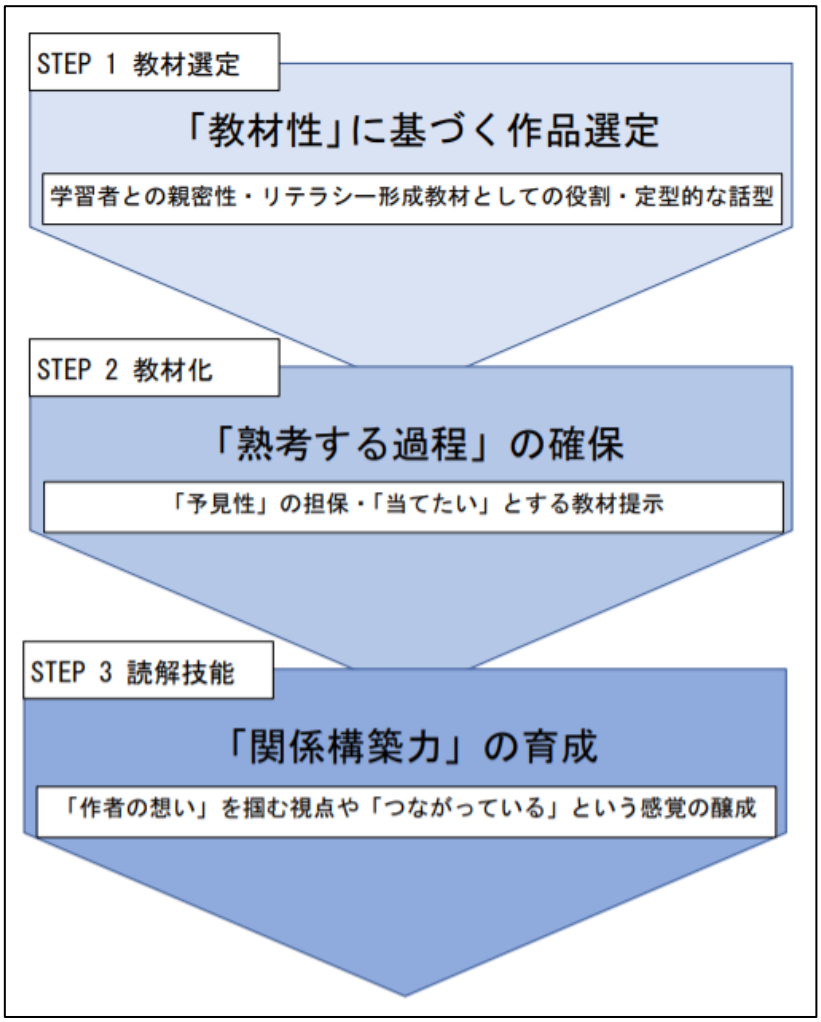

図 2　国語科授業におけるマンガ教材研究の流れ

6.2　マンガ教材が誘発する「関心・意欲」の高まりに関わる知見

国語科授業でのマンガ教材の活用において、学習者の関心・意欲が高まる具体的な複数の誘因が明らかになった。多層にわたる誘因は大別して「マンガの諸特性」と「授業展開の工夫」の二点に集約された。

ページやコマ割りなどのマンガのメディア特性や、愛好するマンガの世界観やキャラクターの存在による影響を踏まえると、マンガでなければ生じなかった情感も存在していた。こうした事実は、マンガを教材として採用する一つの理由となると考える。

また教材化にあたっては、マンガ教材の後半部分を隠して提示するという方法を採用した。結果として、その工夫が「知りたい・考えたい」という情感を生むことにつながったことが示された。

6.3 「マンガと連続型テキストの読解における構成要素」に関わる知見

マンガは文学作品に近接するメディアとして位置付けられてきた。研究を通じて、両メディアの間には、読解における構成要素にも共通性が見られることが明らかになった。あわせて、マンガと説明文の間にも読解における構成要素に共通性が認められることが示唆された。第 7 章で示したモデル図は読解技能の往還性を示しており、学習が横断的に展開される可能性が生じたと言える。今後の実証的な研究により、マンガ以外のメディアにも連続型テキストの読解における構成要素の共通性が認められれば、幅広いメディア選択が可能となり、新たな教育プログラムの実現につながると考える。一連の成果は、桑原（1996a）が提唱する「機能的教材」の「独自な価値や有効性」の一端を解明したものとして位置付けられる。

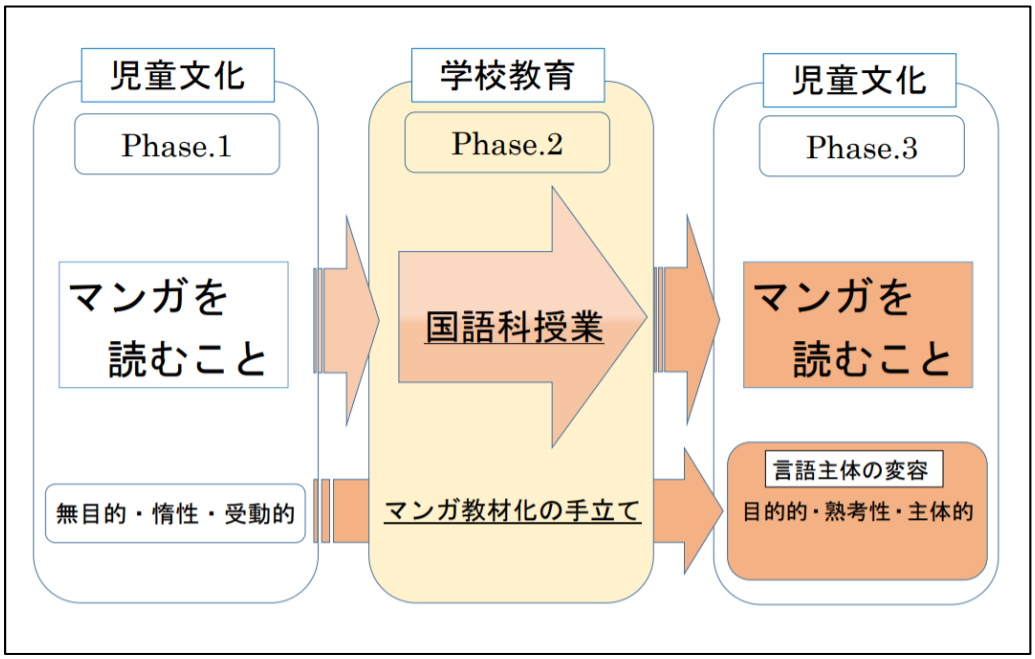

図 3　授業後の「マンガを読むこと」に関わる質的変容

6.4 マンガ教材を効果的に活用する「授業デザイン」に関わる知見

第 8 章では、マンガ教材を用いた国語科授業デザインを提示した。これは本研究で得られた知見を総合的に合わせて構築されたものとして位置付けられる。よって、この授業デザインは国語教育研究だけでなく、マンガ研究をはじめとする他の学術分野の知見も踏まえた学際的な内容となっている。つまり、第 1 章で取り上げた町田（2014）の「マンガに関する研究が体系的に整理され、学際的に相互参照されることが研究レベルでの今後の課題である」（p.179）とする提言を反映した結果として位置付けられる。

本研究で生成したモデルは、方法論的限定を前提とする暫定的なモデルであり、今後はこのモデルを新たに量的研究やトライアンギュレーション（triangulation）などの立場から、検証していく必要がある。本研究で生成されたモデルを土台として、さらに汎用性の高いモデルを構築する可能性が拓かれたことは、国語教育研究の分野におけるマンガ教材研究の発展につながる意義を有していると言えよう。

7. 今後の課題と展望

以上、四点の成果を整理・提示することによって、国語科教育でマンガ教材を扱う意義を明確にすることができた。最後に、本研究で残された二点の課題を提示する。

第一に、マンガと連続型テキストに共通する読解技能の転移の問題である。本研究では、マンガと他メディア間に共通する技能を転移させるための具体的な方法論の構築までは至らなかった。マンガの読解技能の転移に関しては、さらに実証的な研究が望まれる。

第二に、教材化における提示方法の問題である。本研究の授業実践では、最後のセリフやコマを意図的に空白にして教材化した。しかしながら一方で、他の提示方法を採用した場合には、結果も異なることが予想される。達成目標やねらいによって、提示の仕方を柔軟に変えることが重要であり、教材化の手立てに関する研究も必要になると考える。

8. 文献一覧

≪引用文献≫

青山由紀（2003）「単元学習から年間計画を作る 単元『まんがをこえた小説』を事例として」［編］日本国語教育学会『月刊国語教育』 No.373, pp.12-17.

明石要一（2004）『子どもの漫画読解力をどう見るか』明治図書

有澤俊太郎（2002）「教材・学習材論から 21 世紀の国語教育実践学を考える」『国語科教育』第 52 巻, 全国大学国語教育学会, pp.4-5.

有澤俊太郎（2014）「理論研究と実践研究の方法」『国語科教育』第 75 巻, 全国大学国語教育学会, pp.5-6.

家島明彦（2006）「理想・生き方に影響を与えた人物モデル」『京都大学大学院教育学研

究科紀要』第 52 巻, pp.280-293.
池田修（2014)「マンガ漢字学習材の開発に関する一考察～恐怖を刺激する勉強から、興味を素材にする学習へ～」『全国大学国語教育学会研究発表要旨集』第 126 巻, pp. 263-266.
石子順造（1994)『戦後マンガ史ノート』紀伊国屋書店
井上尚美（2007)『思考力育成への方略―メタ認知・自己学習・言語論理―〈増補新版〉』明治図書
井上豊久（2010)「メディア接触の問題性と読解力・読書」［編］国立教育政策研究所『読書教育への招待―確かな学力と豊かな心を育てるために―』東洋館出版社, pp.165-173.
岩崎久美子（2010)「中学生とマンガ―何をどのように読んでいるのか―」［編］国立教育政策研究所『読書教育への招待―確かな学力と豊かな心を育てるために―』東洋館出版社, pp.174-183.
岩下朋世（2016)「キャラクターを見る、キャラクターを読む」［編］小山昌宏・玉川博章・小池隆太『マンガ研究 13 講』水声社, pp.149-173.
岩永正史（1991）「『モンシロチョウのなぞ』における予測の実態――児童の説明文スキーマの発達――」『読書科学』第 35 巻, 第 4 号 日本読書学会, pp.121-130.
岩永正史（2003)「メディア受容能力を育てる授業設計」［編集代表］井上尚美・［編］岩永正史『国語科メディア教育への挑戦』第 1 巻 小学校編①（低学年～中学年）明治図書, pp.185-207.
上田祐二（2015)「マルチメディア時代の読書とその教育」［編］山元隆春『読書教育を学ぶ人のために』世界思想社, pp.216-240.
江藤文夫（1978)「映像時代の文化と出版」『朝日ジャーナル』朝日新聞社, 1978 年 11 月 17 日号, Vol.20, No.46, p.65.
OECD（2011)『学習成果の認証と評価 ――働くための知識・スキル・能力の可視化』」［編］OECD・［監訳］山形大学教育企画室・［訳］松田岳士, 明石書店
大久保紀一朗・佐藤和紀・中橋雄・浅井和行・堀田龍也（2016）「マンガを題材にしたメディア・リテラシーを育成する学習プログラムの開発と評価」『教育メディア研究』第 23 巻, 第 1 号, 日本教育メディア学会, pp.33-46.
大久保紀一朗・和田裕一・窪俊一・堀田龍也（2018）「マンガの読解力と文章の読解力の関係性―小学校第 6 学年を対象とした調査―」『教育メディア研究』第 25 巻, 第 1 号, 日本教育メディア学会, pp.19-35.
奥泉香（2006）「『見ること』の学習を、言語教育に組み込む可能性の検討」［編］リテラシーズ研究会『リテラシーズ 2 ―ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版, pp.37-50.

奥泉香（2015）「メディア・リテラシー教育の実践が国語科にもたらした地平」［監修］浜本純逸・［編］奥泉香『ことばの授業づくりハンドブック メディア・リテラシーの教育―理論と実践の歩み―』溪水社, pp.5-18.

奥泉香（2018）『国語科教育に求められるヴィジュアル・リテラシーの探究』ひつじ書房

大村はま（1983）『大村はま国語教室　第 2 巻　聞くこと・話すことの指導の実際』筑摩書房, pp.319-337.

川嶋正志（2018）「漫画・動画を読むことの可能性―『この世界の片隅に』の教材化」［編］東京学芸大学附属小金井中学校『研究紀要』第 54 巻, pp.143-158.

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂

木下康仁（2007）『ライブ講義 M－GTA――実践的質的研究法　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂

倉沢栄吉（1974）『国語教育講義―新時代の読書指導を中心に―』新光閣書店

グルンステン, T.／［訳］野田謙介（2009）『マンガのシステム コマはなぜ物語になるのか』青土社／［原著］Groensteen, T.（1999）*Systéme de la bande dessinée*, Paris: Presses Universitaires de France.

桑原隆（1996a）「国語単元学習論――言語生活からの構想――」［編］田近洵一『国語教育の再生と創造―21 世紀へ発信する 17 の提言―』教育出版, pp.194-207.

桑原隆（1996b）『言語生活者を育てる―言語生活論＆ホール・ランゲージの地平』東洋館出版社

桑原隆（1996c）「言語環境の変化と国語教育の課題」『国語科教育』第 43 巻, 全国大学国語教育学会, pp.4-8.

向後智子・向後千春（1998）「マンガによる表現が学習内容の理解と保持に及ぼす効果」『日本教育工学雑誌』第 22 巻, 2 号, 日本教育工学会, pp.87-94.

小柳和喜雄（2008）「学校外の子どものメディア利用を授業へ組織化する方法に関する研究」『教育メディア研究』第 15 巻, 1 号, 日本教育メディア学会, pp.29-40.

西條剛央（2005）「質的研究論文執筆の一般技法――関心相関的構成法」『質的心理学研究』第 4 号,No.4, 日本質的心理学会, pp.186-200.

西條剛央（2007）『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編』新曜社

坂入笑美・宮本友弘（2010）「青年期におけるマンガ読書の効果(1) ―気分の変容に着目して―」『日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集』, p.702.

阪本一郎（1973）「マンガの読み方・読ませ方―マンガから読書指導へ―」［編］東京教育大学内児童研究会（1973）『児童心理』第 27 巻, 第 9 号, 金子書房, pp.50-59.

佐藤佐敏（2009）「読みの方略が転移する可能性――作品を解釈する仮定スキルが他の読みの場面で活用される条件――」『国語科教育』第 65 巻, 全国大学国語教育学会, pp.59-

66.
佐藤学（2000）『「学び」から逃走する子どもたち』岩波書店
首藤美香子（2010）「『児童文化』・『子ども文化』の定義をめぐって」『チャイルド・サイエンス』第 6 号，日本子ども学会，pp.8-11.
砂川誠司（2009）「メディア・リテラシーの授業における感情を伴う〈振り返り〉の必要性—D.Buckingham の学習モデルの検討を通して—」『国語科教育』第 66 巻，全国大学国語教育学会，pp.35-42.
住田勝（2017）「文学の学びにおける慣習的知識の検討—『ごんぎつね』を中心として—」『学大国文』第 59 号，pp.37-74.
高木まさき（2005）「『遅い情報』としての文学に触れること——国語教育の立場から——」『日本文学』第 54 巻，第 3 号，日本文学協会，pp.10-18.
高橋和夫（1970）『国語教材論の構想—言語象徴と対象世界—』明治図書
高橋勝（2002）『文化変容のなかの子ども——経験・他者・関係性』東信堂
竹内郁郎（1971）「マスメディアの多様化と読書」／毎日新聞社（1971）『読書世論調査 1971 年版 学校読書調査 1971 年版』毎日新聞社，pp.6-7.
竹熊健太郎（1995）「風景とドラマの対位法—つげ義春『海辺の叙景』の異様な視覚効果—」別冊宝島 EX『マンガの読み方』，宝島社，pp.210-215.
田近洵一（1993）『読み手を育てる——読者論から読書行為論へ』明治図書
玉田圭作（2010a）「教育とマンガに関する研究の全体像—既存の研究と最近の動向から—」『哲學』第 123 集，三田哲學會，pp.207-228.
玉田圭作（2010b）「情動的要因がマンガを利用した学習に与える影響—教材評価を中心に—」『人間と社会の探究』慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要，第 70 号，pp.181-183.
玉田圭作（2011）「マンガと教育に関する研究の概観と今後の課題—マンガ教育学の実現へ向けて—」『マンガ研究』vol.17，日本マンガ学会，pp.124-127.
玉田圭作（2015）「ストーリーマンガ読解時の没入状態と読み速度の関連」『日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集』日本教育心理学会，p.457.
千葉県習志野市立大久保小学校（2011）「マンガを活用した国語の授業 ノベライズと故事成語のマンガ化」『総合教育技術』 6 月号，小学館，pp.86-89.
塚田泰彦（2015）『国語教育研究手法の開発』［編］全国大学国語教育学会，pp.3-4.
塚田泰彦（2016）「読書の現在」『情報の科学と技術』第 66 巻，第 10 号，情報科学技術協会，pp.508-512.
中澤潤（2004）「マンガ読解力の規定因としてのマンガの読みリテラシー」『マンガ研究』vol.5，日本マンガ学会，pp.6-25.
中澤潤（2005）「マンガのコマの読みリテラシーの発達」『マンガ研究』vol.7，日本マンガ

学会, pp.6-21.
中澤潤・中澤小百合（1993）「漫画読解力の発達―漫画がわかるとは何か？―」『子どもと漫画―「漫画読解力」はどう発達するか―』『現代児童文化研究会』調査報告書, pp.85-189.
中澤潤・望月千恵子（1995）「マンガ読解力が学習マンガの理解に及ぼす効果」『日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集』日本教育心理学会, p.369.
永田麻詠（2011）「エンパワメントとしての読解力に関する考察――キー・コンピテンシーの概念を手がかりに――」『国語科教育』第 70 巻, 全国大学国語教育学会, pp.60-67.
中野晴行（2004）『マンガ産業論』筑摩書房
奈須正裕（2017）「子供の視点に立った教育課程の創造とアクティブ・ラーニング」『国語科教育』第 81 巻, 全国大学国語教育学会, pp.6-8.
夏目房之介（1997）『マンガはなぜ面白いのか―その表現と文法』日本放送出版協会
夏目房之介（2007）「マンガの方法と想像力」『教育研究』第 62 巻, 第 8 号, 通巻 1266, 初等教育研究会, pp.14-17.
滑川道夫（1961）「教育と児童文化」『親と教師のための児童文化講座 1　子供の生活と文化』 弘文堂／［編］加藤理・鵜野祐介・遠藤純（2012）『叢書 児童文化の歴史　Ⅲ 児童文化と子ども文化』港の人, pp.50-64.
滑川道夫（1970a）『児童文化論』東京堂出版
滑川道夫（1970b）『読解読書指導論』東京堂／［編］西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男（1988）『文学教育基本論文集』第 3 巻（1970～1979 年）, 明治図書, pp.216-230.
滑川道夫（1979）『映像時代の読書と教育』国土社
難波博孝（2002）「マンガの構造と子どもとの相互作用―『超現実的な力が働く、幼年向けマンガ』から見えること―」［編］川端有子・戸苅恭紀・難波博孝『子どもの文化を学ぶ人のために』世界思想社, pp.19-31.
根本正義（2010）『国語教育とマンガ文化――二十一世紀の課題と提言――』ゆいぽおと
秦美香子（2018）「大学教育におけるマンガの可能性―マンガ研究の視座から―」『学校教育におけるマンガの可能性を探る』［監修］早稲田大学教育総合研究所 早稲田教育ブックレット No.18, 学文社, pp.3-13.
畠山兆子・松山雅子（2006）『新版 物語の放送形態論―仕掛けられたアニメーション番組』世界思想社
羽田潤（2019）「メディア・リテラシー」『新たな時代の学びを創る　中学校・高等学校国語科教育研究』［編］全国大学国語教育学会, 東洋館出版社, pp.218-220.
羽田潤（2020）「国語科メディア教材としてのマルチモーダル・テクストの可能性――短編アニメーション『ひな鳥の冒険』の予告編制作から見えてきたもの――」『国語科教育』

第 87 巻, 全国大学国語教育学会, pp.11-13.
バッキンガム, David.／［監訳］鈴木みどり（2006）『メディア・リテラシー教育――学びと現代文化』世界思想社 ／Backingham, D.（2003）.*Media Education：Literacy, Learning and Contemporary Culture*. Cambridge: Polity Press.
浜谷直人・江藤咲愛（2016）「ヒーローごっこ遊び実践と集団づくり」『人文学報』 No.512-5, 首都大学東京人文科学研究科, pp.33-48.
浜本純逸（2011）『国語科教育総論』溪水社
浜本純逸（2015）「メディア・リテラシー教育の授業デザインのために」［監修］浜本純逸・［編］奥泉香『ことばの授業づくりハンドブック メディア・リテラシーの教育―理論と実践の歩み―』溪水社, pp. i -vi .
フォースター, E.M.／［訳］中野康司（1994）『小説の諸相』 みすず書房／［原著］Forster, E.M.（1927）*Aspects of the Novel* . London: Edward Arnold.
府川源一郎（1995）「読書行為と子どもたちの成長」［編］田近洵一・浜本純逸・府川源一郎『「読者論」に立つ読みの指導―小学校低学年編―』東洋館出版社, pp.11-32.
藤井知弘（2002）「国語科授業研究における質的研究法の意義」『国語科教育』第 51 巻, 全国大学国語教育学会, pp.50-57.
藤子・F・不二雄（2000）『藤子・F・不二雄のまんが技法』小学館, pp.113-132.
藤森裕治(2004)「第四の言語活動『みること』－批判力を育てるメディア・リテラシーの行方－」『月刊国語教育研究』No.383, pp.2-3.
藤森裕治（2013）「国語科授業研究・学習者研究方法論の温故知新」『全国大学国語教育学会大会研究発表要旨集』第 125 巻, pp.233-234.
毎日新聞社（1970）『読書世論調査 1970 年版 学校読書調査 1970 年版』毎日新聞社
毎日新聞社（1971）『読書世論調査 1971 年版 学校読書調査 1971 年版』毎日新聞社
毎日新聞社（1977）『読書世論調査 30 年―戦後日本人の心の軌跡―』毎日新聞社
毎日新聞社（1980）『学校読書調査 25 年―あすの読書教育を考える―』毎日新聞社
毎日新聞東京本社（2018）『読書世論調査 2018 年版』毎日新聞東京本社
マクラウド, S.／［監訳］岡田斗司夫（1998）『マンガ学　マンガによるマンガのためのマンガ理論』美術出版社／［原著］McCloud, S.（1993）*Understanding Comics*：*The Invisible Art*. New York: Harper Collins.
町田守弘（1995）『授業を創る―【挑発】する国語教育』三省堂
町田守弘（2001）『国語教育の戦略』東洋館出版社
町田守弘（2009）『国語科の教材・授業開発論―魅力ある言語活動のイノベーション―』東洋館出版社
町田守弘（2014）「国語科におけるマンガ教材の可能性―その扱い方をめぐって―」早稲田

大学教育・総合科学学術院『学術研究（人文科学・社会科学編）』第 62 号, pp.163-181.
町田守弘（2015）『「サブカル×国語」で読解力を育む』岩波書店
松岡礼子（2014）「高等学校におけるマルチモーダル・テクストの理解方略指導―全員履修科目「国語表現Ⅰ」の単元「CM 分析」にみる可能性と課題―」『国語科教育』第 76 巻, 全国大学国語教育学会, pp.63-70.
松下義一（2002）『ぼくはこんな「総合学習」をつくってきた―1971～2002 学級通信「ひこばえ（蘖）」7000 枚の軌跡―』小学館, pp.65-71.
松下義一（2011）「ドラえもんの『タンポポ空を行く』を活用した授業（小学 3 年生）」『総合教育技術』 6 月号, 小学館, pp.82-85.
松本浩司・家島明彦・玉田圭作・山田智之・菅谷充・町田守弘（2013）「マンガと教育に関する研究の展開―授業においてマンガを活用する実践に注目して―」『日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集』日本教育心理学会, pp.S116-S117.
松山雅子（2005）［編著］松山雅子『自己認識としてのメディア・リテラシー 文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発』教育出版
松山雅子（2014）「テクスト内の関係性を読み解く力の育み―表現形態としてのマンガの再発見」『月刊国語教育研究』No.502, pp.28-31.
村田夏子（1993）「教授方略としての漫画の効果」『読書科学』第 37 巻, 第 4 号, 日本読書学会, pp.127-136.
森貴志（2019）「デジタル時代の出版と読書」［編］相模女子大学学芸学部メディア情報学科『メディア情報研究』第 5 号, pp.35-46.
森大徳（2018）「マンガを文学作品として読む―こうの史代『夕凪の街』教材化の試み―」『学校教育におけるマンガの可能性を探る』［監修］早稲田大学教育総合研究所 早稲田教育ブックレット No.18, 学文社, pp.33-42.
森田真吾（2015）「多様な言語材を活かした国語科指導の可能性について（2）―これまでの国語科指導における多様な言語材の位置づけ―」『千葉大学教育学部研究紀要』第 63 巻, pp.159-167.
山田範子（2019）「作者の描き分けを解釈する『ママゴト』（松田洋子）の授業――国語科教育でストーリーマンガを扱う可能性を探る――」『解釈』第 65 巻, pp.32-40.
山田暢子（2004）「娯楽化する教育――『ドラえもん』のエデュテイメント教材を中心に」『マス・コミュニケーション研究』 第 64 巻, 日本マス・コミュニケーション学会, pp.164-177.
山元隆春（1994）「読みの『方略』に関する基礎論の検討」『広島大学学校教育学部紀要』第Ⅰ部, 第 16 巻, pp.29-40.
山元隆春（2015）「リテラシーを育てる読書教育の構想」［編］山元隆春『読書教育を学ぶ

人のために』世界思想社, pp.241-259.
吉岡亮衛（2010）「中学生の読解力と読書活動の関係」［編］国立教育政策研究所『読書教育への招待―確かな学力と豊かな心を育てるために―』東洋館出版社, pp.146-164.
吉田佐治子（2013）「教材としてのマンガ」『摂南大学教育学研究』第 9 号, pp.25-34.
吉田佐治子（2016）「マンガを読むには何が必要か」『摂南大学教育学研究』第 12 号, pp.1-16.
米谷茂則（2009）「マンガ読書からマンガ読書学習へ」『読書科学』第 52 巻, 第 3 号, 日本読書学会, pp.128-138.
和田敦彦（2002）『メディアの中の読者―読書論の現在―』ひつじ書房
van Dijk.T.A. & Kintsch,W.（1983）.*Strategies of discourse comprehension.* New York:Academic Press.

《マンガ文献》
藤子・F・不二雄（1975）『ドラえもん』第 7 巻, 小学館, p.170, p.173.
藤子・F・不二雄（1983）『ドラえもん』第 26 巻, 小学館, p.120.
藤子・F・不二雄（1983）『ドラえもん』第 28 巻, 小学館, p.55, p.59, p.61.
藤子・F・不二雄（2019）『学年別ドラえもん名作選 ドラえもん六年生』小学館 , p.109, p.110, p.126, p.129.
マクラウド, S.／［監訳］岡田斗司夫（1998）『マンガ学』美術出版社, p.39, p.51, p.76.

《インターネット文献》
大内善一・中西一弘（2008）「第 1 章 4. 2.（2）メディア・リテラシー教育の教材を改善・充実させる」みずほ総合研究所株式会社「教科書の改善・充実に関する調査研究報告書（国語）―平成 18、19 年度文部科学省委嘱事業「教科書の改善・充実に関する研究事業」―」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/08073004/002/006.htm （2020 年 8 月 18 日確認）
外務省（2006）「『ポップカルチャーの文化外交における活用』に関する報告」https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/shingikai/koryu/h18_sokai/05hokoku.html（2020 年 8 月 18 日確認）
全国学校図書館協議会（Japan School Library Association）「第 65 回学校読書調査（2019 年）」https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html（2020 年 8 月 18 日確認）
総務省「平成 30 年版　情報通信白書のポイント」における「図表 4-2-1-3　スマートフォンの個人保有率の推移」https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h3

0/html/nd142110.html（2020 年 8 月 18 日確認）
株式会社バンダイ（2018）「『お子さまの好きなキャラクターに関する意識調査』結果」「バンダイこどもアンケートリポート」vol.244 www.bandai.co.jp/kodomo/pdf/question244.pdf 【2020 年 8 月 18 日確認】
文化庁（2019）「平成 30 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/r1393038_02.pdf（2020 年 8 月 18 日確認）
星暁子・行木麻衣（2018）「幼児のテレビ視聴と録画番組・DVD の利用状況～2018 年 6 月「幼児視聴率調査」から～」『放送研究と調査』第 68 巻，第 10 号，NHK 放送文化研究所，pp.64-77. www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20181001_8.pdf 【2020 年 8 月 18 日確認】
舞田敏彦（2016）「マンガだけじゃない！日本の子どもの読書量は多い」『Newsweek ニューズウィーク日本版』https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2016/07/post-5511_1.php（2020 年 8 月 18 日確認）
文部科学省（2005）「親と子の読書活動等に関する調査　第 3 章 アンケート調査の結果 5. マンガと読書の関係」平成 16 年度文部科学省委託事業　図書館の情報拠点化に関する調査研究 http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05111601/003/005.htm（2020 年 8 月 18 日確認）
文部科学省・国立教育政策研究所（2019）「OECD 生徒の学習到達度調査 2018 年調査（PISA2018）のポイント」https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf（2020 年 8 月 18 日確認）